明治四拾二年四月二日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第六卷
第一號

明治四十二年四月一日發行

Dai 6 Kan. KATEI ZASSHI Dai 1 Go.

家庭雜誌社
東京府下大久保仲百人町二百十二番地



四月一日より

一第十七回新柄陳列會

一懸賞課題光琳式明治模様陳列

一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右弊店内に於て盛大に開會致候間御誘ひ合され賑々敷御遊覧被成下候様奉願上候

一兒童博覧會

右三越呉服店内特設陳列場に於て開會致し大方の御縦覧に供し候

東京日本橋

三越呉服店

本誌を讀まぬは婦人の耻なり

婦人世界

四月一日發行　四卷第四號　一冊拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共一圓五錢　一年分二圓五錢

◎九州を旅行して婦人たちの親切で優美なのには感服したり……村井弦齋

◎姑のない家に嫁いだのが今は苦勞の種となる……大久保露子

◎天幕の中で新婚旅行

◎初めてお眼にかゝる記……鳩山春子夫人

◎衣服を破つたとて子供を叱る母親の氣が知れぬ……（米國文學士）田添幸枝子

◎家風を教へずに女中を叱るは主人が惡い……子爵 加納久宜

◎獨逸大學に入學し貧苦と戰ひつゝ苦學せし實驗……（間野俊子）

◎私の媒妁で圓滿なる結婚をなさせし實驗……佐治實然

◎西洋音樂は如何にせば最も早く上達するか……音樂學校教授 安藤幸子

◎弦齋夫人料理談

◎分娩時に入用な品物……醫學博士 榊

◎父を助けて新聞配達しながら洋畫家となりし婦人……

臨時増刊 **結婚の巻** 四月十五日發行

◎體裁優美、内容豊富
◎定價郵税、平常號に同じ

東京京橋南紺屋町十二　實業之日本社　郵便振替貯金口座參六番　電話新橋八七四番　賣捌全國書店

校長　小出新次郎先生

學監　小川直子先生

女學生募集

速成科　高等女學部

尋常師範科　高等師範科

（各科五十名づゝ入學を許す）

新築校舍落成に付來る四月新學期より各科共五十名宛入學を許す

入學志望者は來る四月十日限り履歴書相添へ入學願書を差出さるべし

校則入用の向は郵券二錢を添へ申込まるべし

東京青山穩田

女子高等裁縫學院

◎最新式流行東京まげ形の眞價を見!!!

（登錄出願中）　定價極大一個十三錢○大壹個十二錢●壹番壹個十一錢

本品は消毒せし純良の綿と燈心製荒しぼりにて眞なく形は優美高尚にして少しくいきな所を含めども卑しからず特に結び心地誠によろしく輕き事他品にまさり衛生に適ひ居れば自ら流行を來たし今や御婦人方の歡迎を受くる事頗る非常にして東都に於ける好評嘖々として賣行盛んなり

京橋區尾張町（電新五五二）　白牡丹店本店
京橋南傳馬町（電本三一〇）　大西白牡丹店
四谷區傳馬町（電番九五）　白牡丹岡本店
小石川 小日向水道町　越後屋小間物店
赤坂一ツ木四（電新一五一二）　松下洋品店
神田旅籠町（電下四四二）　伊勢惣商店
神田須田町（電本二〇七六）　三ツ井屋本店
麹町四丁目（電番一九四二）　荒井本店
牛込納戸町　駿河屋小間物店
青山北町六丁目　伊勢屋小間物店

京橋區尾張町（電新二七六七）　光明堂
京橋區銀座二　胡蝶園
本郷駒込東片　柏屋小間物店
本郷三丁目（電下一三三六）　かねやす小間物店
日本橋通二（電本二〇一）　柳屋本店
芝新幸町　柳屋支店
青山南五丁目　荒井分店
京橋松屋町　田邊小間物店
北品川 徒歩新宿　吉川屋小間物店
芝伊皿子町　小淸水小間物店

高貴御料

登錄商標

東京形



別製東京形　右の特約販賣店にて賣捌仕候間御最寄にて御買求め願上候

製造元　東京市淺草區西鳥越町二番地（電話下谷二九五二）（振替口座一五八〇六）　三河屋　高津商店



佛国自然派画傑フランソワミレー筆（1814―1875）
図模写

家庭雜誌
第六卷第一號
明治四十二年四月一日

夕暮

翠村

凄まじく半天を蔽ふてゐた冬の雲間を洩れて、血の様な光は流れた。流れてそして烈しく町の大路を照らした。

人々はぞろ〳〵と行つた。行き違ふ人、追ひ越し追ひ越さるゝ人、埃を蹴つて行く人、肩を怒らして急ぐ人、夕暮の町は明かなる混亂の姿を示した。

自分も其の中を歩るいて行つた。そしてふと、とある處に來た時、練兵の歸途らしき一隊の軍隊に出會た。年若き士官は劔を閃めかして先頭にあつた。兵卒は土、馬糞、墨液等によりて黒く汚れた軍服を纏つてゐた。そして蕭々と、さも勞れ切つた者の様に此の混亂の中を歩るいて行つた。人々は士官の軍服を見た。次ぎに兵卒の軍服を見た。羨望と嫉視との眼は忽ちに失意となり哀愁となつた。人々はぞろ〳〵と行つた。兵卒は蕭々と行つた。ぞろ〳〵の人は蕭々の兵卒に向つて同情と涙とを灑ぐべく、餘りに生存の運命に弄せられて、餘裕と平靜を持た無かつた。

自分は鉛の様な憂愁の思を懐いてとぼ〳〵と歩いた。

自由結婚は可きか惡き乎

自然主義、個人主義、本能主義、社會主義婦人解放論等の思想があるかと思へば、儒敎道德あり、佛敎主義あり、武士道論のある日本の社會です。從つて家庭の中にも種々雜多の思想が入つて居るに相違ありません斯る社會、斯る家庭に人となれる青年子女は、恐らく矛盾した思想に動搖せしめらるゝ事でありましやう。殊に齡頃の男女にして、時代の感化を自然に受けながら、一方には家庭敎育に依て其の思想なり、主義なり）を壓迫せられて非常なる煩悶に陷つて居る人も尠くないでありましやう。

吾等は玆に感ずる處あつて、左の質問書を名士數十家に提出し、以下列記するが如き應答を得ました、是等諸家の高見に依て、吾愛讀者諸君は必ずや思想上に何等かの裨益を得らるゝ事と信じます。

質問

（一）、自由結婚は、自然なる結婚なる乎。

（二）、自由結婚は、現在の道德律に律せらる可きもの乎。

（三）、自由結婚は、奬勵す可きものか、排斥す可きもの乎。

（四）、自由結婚は、範圍を制限するの必要ありや

（以下右に對する諸家の應答を到着順に列記す）

「一」與謝野寛氏

拜復、御尋ねの自由結婚と云ふが如き事柄は、理論として討究すべき問題にあらずして、將來人智と、人情とが圓滿に發達致候はゞ當然實行せらる可き事實なりと存候、即ち自然に道德家も敎育家も社會改良家も一般の家庭も此の自由結婚の眞意義を領解致候日の來り候はゞ、我等が三度の食事を怪まぬ如くに當然實行

せらる可き義と信候夫迄は早く此の實際事件に逢着したる青年男女諸君が自己の理性と感情の合法的に命する儘に之を實行して、半開半野なる今の社會及家庭に反抗して宜しからむと存じ候、弊害などを憚り居りては戀愛は成立たず候。

「二」伯爵柳澤保惠氏、

自由結婚に關して御問合有之候へ共足下の所謂自由結婚の意味の何たるや了解致し兼ね候に付甚だ御答へに窮し申候、若し右意味にして、『勝手氣隨の結婚』と云ふ事に候はゞ左の如く御答へ申す可く候。

(一)に對しては否。(二)に對しては然り。

(三)に對しては排斥すべし。(四)に對しては然り。

三月十四日　柳澤純水生

「三」後藤宙外氏

拜復御問合せの件左に御答へ申上候。

(一)自由結婚は主情的、元始的立地より見れば自然なるべく、家族眼、經濟眼より見ては結婚者の事情次第いづれともなるべく候。

(二)道德上の罪にはこれなるまじく唯習慣上異例として他の物議にのぼるものなるべしと存じ候。

(三)一概には言ひ難し、その當事者の位地、年齡、性質、事情に依るべく候。つまりは幸福なる家庭を長く維持し得るものならば排斥すべき理由なし、さりとて總ての者に奬勵することは危險に候。

(四)無論制限を要することゝ存じ候。

「四」子爵曾我祐準氏

(一)知らす。

(二)分らす。

(三)奬勵を好ます。

(四)答の要あらす。

曾我祐準

「五」醫學博士金杉英五郎氏

(1)自由結婚は動物的なれば自然なるべし、乍併人間と

動物の差は一言すれば萬事復雜なる逕行をとると然らざるとにあり故に若し人間が動物と差違あらんを望むなれば結婚も復雜にすべし。

(2)否。

(3)奬勵すべからず絶體廢すべし歐人も心ある人は大に研究しつゝあるなり。

(4)此箇條の問理解し難し。

金杉英五郎

「六」子爵岩倉具明氏

復啓彌々御安康の段奉賀候。

扨て今回「家庭雜誌」御續刊に付自由結婚に對する問題御掲載相成度趣を以て答案御請求越し候得共自分儀未だ若輩にして社會に見聞薄く又た學びの道も淺くして公然發表すべき意見等も持たず加之現時多忙の折柄貴意に應じ難く甚だ遺憾ながら御斷申上候間不惡御諒恕願上候早々。

三月十五日

岩倉具明

「七」ドクトル大石誠之助氏

僕は結婚と云ふ制度に何等の權威ある事を認めないものだ、が唯だ(男女の)自由なる結合と云ふやうな意味でお答をする。

(1)すべての自由なる人間の行動は自然だ。無論自由結婚もさうサ。

(2)今の道徳律は概ね少數の强者と富者と長者の爲めに造られたものだ。それがどうして多數人類の自由行動を律するに足らうか。

(3)放任して置けばよい。

(4)否。

大石祿亭

「八」木下尙江氏

久敷拜顏を不得候處ます〳〵御清榮奉賀候雜誌御繼續の由にて問題御提示の處御返事遲延奉謝候『結婚の意義』と云ふとに付き先決の必要あるべしと存候へ共御下問の問題に就き兎に角左如結論可申上候。

(一)自由結婚は自然なる結婚なり。
(二)自由結婚は現在の道德律に律せらるべき者に非ず
(三)自由結婚は奬勵すべきものなり。
(四)自由結婚は範圍の制限を要せず。

木下尚江

「九」相馬御風氏

拜復自由結婚に關する御下問小生いまだ具體的にそのやうな問題を考へた事は無之候へ共一寸考へたゞけでも自由結婚を絕對に是認する事は不可能のやうに存候いづれはわが國の女なり男なりが今少しエヂユケートされてからの事と存候今の所ではその時その場合その人に應じて考ふるより外無之いづれは個人の問題にして一般上の問題にては有之間敷と存じ候。

相馬御風

「十」小川未明氏

自由結婚に對する可否は議論のみからいふべきもので

なく結果からも見なければならぬと思ふ。單に議論上では差支ないものでも、結果として惡結果を見る場合がある。

(一)自然なる結婚には相違ない。
(二)現在の道德律は、まだどちらかといへば不贊成に、傾いてゐやう。
(三)自分一己の考からいへばもとより奬勵すべきものでない。又排斥する必要も認めぬが、特種の場合には奬勵もするし排斥もする。
(四)範圍の制限を要するは社會の秩序を亂す場合があるからであらう。不正の結婚には干渉すべき必要がある。

小川未明

「十一」上司小劍氏

御問ひ合はせのこと左に御返事申上げます。
(一)自由結婚と云ふこと一寸不明なり。元來結婚と云ふことそれが不自然の意味を含まずや、結婚の二

字は少くとも戀愛とか生殖とか云ふやうなハッキりした文字にあらず。結婚と云ふ二字の上に自由と云ふ二字を加ふるは、木に竹を接いだやうなもの、やうに小生は思ひます。

(二)律せらるゝものでも、律せられざるものでも、强制的に律することのあるのが道德と云ふものゝ本質だと思ひます。

(三)ドウでもよし。

(四)仝上

三月十七日　上司小劍

「十二」ドクトル加藤時次郎氏

(第一問答)結婚が兩性自由の合離を意味し其間兩性が此自由行動に不快の念を生ぜざるものとすれば理想としては之を自然の結婚と稱す可きも然るに今の社會では最初に若き男女が自由の結婚を行ひ后に幾干もなく不和合煩悶を以てするが如きは合理的自由的自然結婚と云ふ可らず依て經濟上人類の平等の成立

せざる今日に於ては自然なる自由結婚なるものは望む可らず。

(第二問答)自由結婚は科學律に合するも現今の道德に律す可らず。

(第三)第一問題を解決するにあらざれば之を奬勵す可きものにあらず然れ共人の意志が絶對に壓する事の出來ぬ以上は之を排斥し得る事も出來ざる可し。

(第四)自由結婚は兩性の意志自由を標準に取る可きものにて之に範圍制限抔を要す可き性質のものにあらず。

三月十八日　加藤時次郎

右御答迄

「十三」幸德秋水氏

自由結婚てふ文字の意義を明らかにせずでは御答へ困難に候

一般に男女の自由なる戀愛に依りて結合し性交し同棲すてふとを意味する者に候はゞ、無論極めて自然な

ると存候。
左れど現時の所謂『結婚』即ち嚴格なる宗教的儀式や窮窟なる法律上の手續きに依れる誓約結合をいふとせば、結婚は決して自由なり得る者に非ず寧ろ人生に對する殘酷なる束縛なるが故に、社會主義者の多くは之を否認致居候、彼等の主張する所は自由結婚にあらずして自由戀愛に候
若し範圍の制限を要する者とせば、自由てふ意義は消失せらるべしと存候
右御答申上候、果して御下問の旨に副ふを得るや否や

幸德秋水

「十四」田岡嶺雲氏

左に鄙見御答申上候
(一)予は結婚其者が既に不自然なるを信ず然れども若し結婚なる人爲の制を已む可からずとすれば其結婚は自由なると自然に近きものなりと信ず(二)現在の道德律は結婚に戀愛を認めず故に自由の戀愛に成るべき自由結婚は現在の道德律と相容れず(三)自由結婚は須く生殖を目的とする無我的なる戀愛の上に立つべし、是れ自然也此意味に於て戀愛は神聖也、結婚も神聖也、未我的なる肉慾の欲求の爲めにする、男女の猥褻は人の私也淫蕩也此が爲めにする自由結婚は高き意味に於ける道德の犯罪也(四)故に今の人より先づ肉慾の私念を除かざれば自由結婚は寧ろ淫奔者の口實たらんのみ

田岡嶺雲

「十五」白柳秀湖氏

(一)謂ふ所の自由結婚とは、人間が冷靜なる理智の判斷によりて、好き配偶者を撰擇するといふ事を意味するか、それとも情の欲するに任せて、恣に異性の愛を貪らんとするを言ふか、何れにても好し。性慾が自然のものたる以上、結婚は素より自由のものたる可し但し、智識の撰擇になりたる夫婦の關係は、たとへ

自由結婚の結果にても破綻に終る事多し。また、舊來の結婚法により、媒介者を通じて成れる、見ず知らずの仲なりとも、感情がシツクリと合へば、階老同穴の契、淺からざる事を得べし。要するに夫婦は感情が融合すればそれにて足れり。肉體の感應があればそれにて好し。感情一片の結合は泡沫の如く危しと云ふ者あれど、智識一片の結合に勝る事萬々也、好いた同志の仲と云ふ事以外に夫婦の意義は無し。結婚と云ふものはそれ以上重大なるものに非ず。世に情人といふものなく、理智の判斷にて配偶者を撰擇ずる程の人は、獨身にて暮す方が寧ろ個性の爲なる可し。

(二)道德と云ふものは、先づ人間の行爲が在りて、而して後に生るゝもの也。宗教家の謂ふ神の掟など云ふものとは、全然其性質を異にし、道德は決して人間の行爲を律し得るものに非ず、人間の行爲が却つて道德を律するもの也、社會人類が擧りて自由結婚をするやうになれば、自由結婚を非とする舊道德は癈滅に歸して、之を是とする新道德生ず可し。

但し社會は複雜なるものなれば、多數が未だ自由結婚を非とするに、己は早くも之を行ひて、世にも、人にも迷惑無しと云ふ偉き人もある可し。かゝる人は默つて自由結婚を行へばそれにて好し。道德といふものは、蜂の巣のやうなもの也、故らに、棒を以て之に障らぬ限り偉き人とは極めて沒交渉のものと知る可し

(三)自由結婚はよきものなれば、先進者は社會人類が擧りて之を爲し得るやうに骨を折る可し。

(四)社會が進歩するに隨ひて、其制限は全然跡を絶つにも至る可し。人間の社會生活に權威の存在を必要とする間、自由結婚にも制限は行はる可し。人間が、權威なしに社會を組織し得る迄に進歩すれば、夫婦同居などいふ馬鹿らしき制度は無くなる可し。

白柳秀湖

(以下次號)

女子の解放

田岡嶺雲

女主男從は自然也

一、人類の發展は解放の發展也

夫れ天下最も眞なるものは自然也、人爲の拘束は僞也。

自然の狀態に於て人に貧富の別なきが如く、貴賤の別なきが如く、男女の性別によりて何等の懸隔あるべからざる也、否寧ろ自然の狀態に於ては女は主たり男は從たり、是れ生物學の證する所、人類學の證する所、確として疑ふ可からず然らば則ち今の人の性別によれる懸隔あるは是れ不自然也、不合理也。

故に今日の狀態を打破して女子を解放し、性の上に平等たらしむるは、人道の大義宜しく當さに然らざる可からざる所也。

二 生物の大目的は生殖にあり

夫れ生物には皆生存の欲求あり、生存の欲求あれば、則ち又其の生存の存續の欲求あらざる能はず、故に生物は個體の生存と共に、又種の蕃殖を欲求す、種の蕃殖は即ち個體の生存延長也、存續也、個體には壞滅あり、個體は之を永久に存續する能はず、乃ち生殖に由りて舊個體より新個體を生じ、以て其の個體の統を傳へて其存續を永久にする也、故に生殖あつて、始めて生物は其生存の存續の欲求を實にするを得る也、故に生物は生殖を待ちて始めて其意義ある也、生殖は即ち生物の最大目的也。

蓋し個體生存の欲求は現在に於ける我の主張（アツサーション）にして、種の蕃殖の欲求は未來に於ける我の主張を意味す、而して現在の我の生存の爲めには營養を要し、種の蕃殖の爲めには生殖を要す、而も生殖に由れる未來の種の蕃殖は即ち現在に於ける我の生存の開展にして、其現在の我を營養するは即ち未來の種の蕃殖を期

待する所以に外ならず語を換へて之をいへば、營養は即ち生殖の前提たる者にして、生あるものは必ず食を要し、又必ず生殖を要するも、其の食を要するは畢竟生殖を要するの準備たるに過ぎざるを以て、營養と生殖とは生物の二大欲求なりと雖も、就中最も重大なるものは、即ち生殖の欲求也。生殖の欲求は即ち生物の凡てを包含す。

人に男女あり、禽獸蟲魚に牝牡雌雄あり、生物が所謂性なるものを相別つ所の者は、即ち此の生殖の遂行便宜の爲めに外ならず、兩性融化して茲に新化體を生ずるを得る也、故に生物は生殖を待ちて始めて意義あり、兩性は又生殖の上にのみ其意義ありとすれば、生物に於ける兩性の對立關係[illegible]即ち

生殖本位の上に立たざる可からず

語を換へて之をいへば、男女兩性の地位は、其生殖に於ける必要の輕重に由て決せらるべき者なりとす、故に男女兩性本來の地位を論せんには先づ其生殖上

孰れか重要なるを究めざる可からざる也。

三、生殖に於て男性はワキ師也

夫れ生物は概ね皆卵生す、植物に種子といひ、動物に卵仔といふ、其名は異なれども、其實は一也、唯僅かに下等生物の獨爲的分裂を營むものを除けば、生物の多半は都べて兩性的生物を爲す、而して此の兩性的生殖を營むに當りて、新生物として發達すべき本質たる卵種（Ovum）を有する者は、即ち女性にして、男性の器能は、單に此女性が有する新生物の本質たるべき細胞に對し、之を實せしむべき細胞を補給するに過ぎざるのみ、即ち子體たるべき本質は女性の具有する所にして男性は單に其發出を適宜にし確實にする補助者たるに過ぎず、故に生殖上男性は女性に對しワキ師たり附錄たるの地位に立つといふことを適當とす。

夫れ此くの如く男性が生殖の上に單に助手たるの地位を有するのみにして甚だ重要の者たらざることを最も明に立證するものは生殖が必ずしも男性の加工助

力を待たずして、女性のみを以て猶能く遂行せられ得る事是也、生物學上に之を處女生殖(Parthe nogenesis)といふ、處女生殖は即ち女性の卵種が男性の受精を經ることなくして獨自に孵化する一種の生殖法にして、固より此處女生殖は生物の或種類若くは或事情に限り罕に起るものたるに過ぎずと雖ども、然れども、仔細に生物界を觀察すれば、其の之を爲し得べき能力を有する痕跡の、獨り下等動物のみならず、哺乳動物中に於てすらも、亦認め得らるべきことをダーウヰン氏之を說き、又生物學者中には、此生殖法を以て生物生殖の正式なりといひ、或は此を目して實現し損ねたる有機的理想なりとすらいふ者あるに觀るも、此生殖法は決して奇蹟にもあらず、寧ろ生殖は其本來に於て必ずしも男性に待つの要あることなく、唯進化の必要上、兩性各其功を別つに至りたるものなることを證するに足るべし、故に遡つてアミーバの如く自家分裂をなすものに於てと雖ども、其親體は之を一種の母體と目して敢て不可なかるべく、兩性生殖に於ける父體は

則ち進化の修正のために、此に添補追加せられたる者に過ぎざるのみ、語を換へて之をいへば、兩性的生殖に於ける子體も、亦自家分裂の獨爲生殖と同じく母體の一種の分岐にして、唯其分岐が父體に加工せらるゝを異なりとするのみ、故に兩性的生殖に於て親體は二個なりと雖ども、其主なる者は母體たるや勿論也。以上說く所に由つて之を觀れば、生殖上主なる正なる地位を占むべき者は女性にして男性は唯其從たり副たるに過ぎざる也。

四、男性は女性の支柱のみ

之を胎生の上より觀て、男女兩性中子體たるべき本質を具有する者は女性にして男性は僅に此に參贊するに止まるものなること既に之をいへり、更に一歩を進めて之を論ずれば、生物が簡單なる獨爲的生殖(アミーバの如き)より、進んで比較的複雜なる兩性的生殖を營むに到る所以は、生物が自然陶汰に克ち進化せんが爲めには成熟せる生殖を要し、從つて此に費す努力

（例へば妊娠乳養の如き）大を加ふるが故に、一已にして營養と生殖とを併せ營むの餘力を存せざるに至るを以て、乃ち兩者を分業して、主として生殖の任に當るものと、主として營養の任に當るものと各其責を別つの必要を生じたるに由るものにして、而して其分掌上營養に當る者は男性にして、生殖には女性之に當るに至りたる也。

而して前にも既に之を論せるが如く、營養と生殖とは生物の二大欲求にして、而して其生存の爲めにする營養は、畢竟するに生殖のための豫備たるに過ぎざるものにして、營養の充實なければ則ち生殖あること能はざること、之をアミーバの如きものに就て見ても、其生殖の分裂は其體が一定の成熟に達したる後にあらざれば行なはれざるに據りて明かにして、即はち營養の缺乏は直ちに生殖の阻碍を意味すべきものなるが故に、兩性の分掌上男性が主として營養の方面に當ることは即ち亦間接に女性の生殖の幇助を爲す所以たるに外ならざる者なり、語を換へて之をいへば、男性は

女性の生殖を完全ならしめんが爲に、此をして後顧の憂なからしむべき支柱たるの任務に當る者なりとす。

蓋し營養が生殖の一條件として、此と密切の關係を有することは、次の實例にして、之を明かにするを得べし、即ち統計の示す所によれば、豐年には出産率增加し歉歳には減少す、又體溫增加の必要上營養の吸收急なる寒時季には受胎少く血行遲緩にして營養過剩を生ずる暖時季には受胎し、更に又女子の出産が沃土豐年に多きも、及び女子が男子に比し早熟なるも、共に是れ生殖の遂行者たるべき女子は營養の過分を享けて生るゝものたるを示すものにして、即ち生殖は一面よりいへば營養の過剩とも見るべき者にして、生殖には必ず營養の充實を要する者たるは疑ふ可からず。

既に然り、營養は即ち生殖の條件として意味ありとすれば、男女性を別ちて男性の掌る所の營養にある即ち男性の存在は、女性の生殖の幇助者としてのみ始めて其意味あるものたる也。

之を要するに男性は生殖の機能其事に對して一種の

ワキ師たるに過ざると共に又其分掌の上より見て、女性に對する給食者として其保護の任に膺るべき者なりとす、故に男性は、生殖の上に毎に間接の貢献を爲すのみにして、生殖を本位として兩性の關係を論ずれば、女性は主たり正たり、男性は竟に從たり副たるを免るゝ能はず

五、男性は女性に媚ぶべき者也

夫れ生物に於ける兩性對立の理由は、生殖の爲めに外ならずして、而して生殖上、直接に其任に膺るシテたるべき者は女性にして、男子は此に副たるに過ぎずとせば、兩性が相互の關係上其有する地位は言はずして明かなり、即ち女主男從は生物界を一貫するの通義也、即ち凡ての生物は獨り人類を除くの外、皆自然の命ずる所に遵ふて、女主男從也、女性は昂然として男性を頤使するの地位に在り、男性は惴々として只管女性の憐を求むるのみ、女性は則ち生殖の上に批准の大權を有する王者にして、男性は脚下に跪拜する懇求者たり男性は全力を擧げ全身を捧げて女性に奉事す

試に之を動物に就きて見よ、男女兩性の間に、若し形貌の差あらば、其男性に特有なる者は、多くは是れ女性に媚び、女性の愛を牽き若くは女性保護のためにする機關たるに非ざるは無し、之を色彩よりいへば其麗澤に於て優れる者は必ず男性にあり、之を啼聲よりいへば男性は此を以て女性を挑むの具となす也、禽に於て羽毛の飾冠を有し、獸に於て牙角の武器を有する者は毎に男性にして女性に非ず、生物學上所謂生殖的副特質(Secondary sexual Charactor)なる者は盡く是れ男性が依て以て女性を悅ばしむるが爲めに存する者、男性の心身一切は皆女性の爲めに存在ありといふも不可なく男性の女性に對するや、洵に勉めたりと謂ふ可し。(此項未了)

(未完)

太功記十段目　尼ヶ崎の段を讀む

沖野五點

一　死屍の鞭

予嘗て高野山に上り、明智光秀の墳墓が龜裂縱横にして、「一年三百六十日、案内者なる沙彌の口より『逆賊光秀の墓は佛罰を得て斯の如し』と罵られつゝあるを見、恐辱は多力なり、惡を懷はざるが故に兼て安健を加ふといふ佛祖の遺訓を打忘れ死屍に鞭つ僧侶の行爲を怪み、人知れず墓石を撫して悵然たりし事ありき、明智光秀、彼果して死屍に鞭つ程の逆賊なるか、今予が尼ヶ崎の段を讀むに當り先づ彼れの事蹟を一考せざるべからず、織田信長が權勢を得てより其臣下に集れる英雄豪傑、鬼を挫ぐ柴田勝家あり、孫呉を欺く智謀の羽柴秀吉あり、豪膽なる瀧川一益あり、沈毅なる淺野長政あり、されど誰か禮典と學術とに於て丹波龜山城主十兵衛明智光秀に敵し得るものぞ彼が美濃に出で齋藤秀龍、細川藤孝と終を共にする能はず、遂に信長の配下に屬して逆賊と稱せらるゝに至りしもの　これ彼が奸惡邪佞なりし故なるか　天下麻の如く亂れて儒佛の學も僅かに五山の僧徒によつて命脈を繫げる時、學は儒に達し、想は禪機を捉へ、識は有識故實の士と肩を伍する彼果して逆心を以て不軌を圖りしものなるか、人よ先づ彼れが信長を殺したる動機を知らざるべからず、是より先、丹波八上城を攻めて下す能はざりし時、光秀非常なる決心を以て母を質として城主秦秀治兄弟を招けり、信長にして一點の涙あらんか、母を質として降せる秦兄弟を處するに途もありつらんを、殺伐一途の彼は光秀の苦衷を察するなく、秀治兄弟を捕へて遂にこれを焚殺せり、光秀の母亦た城中に焚殺せられたる時、光秀は如何に不期の惡渦に投じて不孝を爲したるかを慨きたらん、これより、光秀怏々として平なる能はず、心中竊に信長を以て愛母の仇と目せしなり、彼が此の千古の大失計をなして不愉快に日を送る時無學にし、酒色をこれ事とする田舍武士の間に雜りて共に亂舞する能はざりしもの、其胸中察するに

餘ありといふべし、嘗ては刀を口邊に擬せられ、今又た家康を饗應する命を受け、古式に習ひ禮法に鑑み意を盡して用意せる膳部の未だこれを運ぶに至らざるに先ち急に秀吉を援けて出軍すべしとの命に接す、彼の失意と憤怒思ふべし、善美を盡したる饗應の膳部は一碎地に委せられぬ。而して叫べり『起て！自由の意志我が器量遂に蠻骨の壓服に堪えず』と、彼は遂に其意中を明智光春、齋藤利三、溝尾義朝、藤田行政の四人に打明け、我が欲する自由行動、若しこれを非とせば請ふ我命を絶ち我をして此の屈辱の苦を脱せしめよと語れり、四士默して諾せり、遂に兵三萬を率ゐ京に行く、途桂川の邊りに來り突如彼は兵を麾き叫んで曰く『敵は本能寺にあり！』これ實に彼が死後三百年、佛祖の遺訓を承體せる空海の廟前に死屍を鞭たれつゝあるその序幕とす、我等は人物を批評し歴史を解するに何等の束縛を受くるなし、歴史的習慣と人爲の傳説を脱却して彼を見んと欲する時、最も人口に膾炙せる繪本太功記十段目尼ケ崎の段を讀み本書の作者が如何なる眼識を以之を物せるかを調査する亦一興ならずや。

二　重次郎論

尼ケ崎の段に見えたる重次郎が出陣の際如何なる惜別の辭を陳べたるか、彼は曰く、『十八年が其間御恩は海山堪難し討死するは武士の習と思召し、先だつ不孝は赦してたべ』、と先だつ不孝とは如何に可憐なる言葉ならずや、所謂蠻風の武士道は、父死するも屍を踏んで進み、父に先だつて討死するがこれ武士の孝行に非ずや、然るに重次郎は武門に育ちながら父に先んじて戰場に死するを以て不孝の罪とせり、且つ彼が負傷して歸りたる時父光秀に對して曰へる言辭を見よ、『眞柴筑前守久吉の家臣加藤淸正是にあり逆賊武智が小わつぱ共見に物見せて呉れんずと、言ふより早く太刀拔かざし四角八面に切立てられ、瞬くまに味方の軍卒殘らず討死仕り無念ながらも唯一騎立歸つて候ふ、親人の御身の上心にかゝり候故未練にも敵を切抜てゝまで落延歸りしぞや、てゝに御座あつては危ふし／＼一時も早く本國へ引取給へ……』とは如何

に彼が父を思ひ家を思ふ情の切なるかを知るべし。然も重次郎の此の負傷を堪えて逃れ歸りし原因の一は父より母より更に深きものありたり、彼の新妻初菊これなり、「もう目が見えぬ……」といふまでも父に逢ひ母を慕ひ、殊に新婚の暖き夢も結びあへず昨の生別今の死別となれる、あはれ果敢なき夢幻の契りを惜まん爲には卑怯よ未練よと云はるゝをも辱とせざりし重次郎の心事　實に血あり情あり涙ある悲劇にあらずや、此間の消息これ軍に臨んでは討死するも父を思ひ母を思ひ妻子を思ふは不忠不義なりと敎ふる化石武士道論者の一考を要する事件にあらずとせんや、妻を忘れ子を忘れ父母を忘れて單に國をのみ思へとは枝を見ず根を思はず花を忘れて其幹のみを注視せよと言ふ無道無理の注文なりと知らずや重次郎が武士道の觀念は實に有情有血の武士道なりと云ふべし、更に一考すべきは重次郎の再婚論なりとす、日清日露の役以後日本の舊道德を打破したるものは實に再婚論なりき、ては今更倫理學者の說明を待たずして、繪本太功記の作者は重次

郎の口を借りて言明せるに非ずや、「初菊殿まだ祝言の盃せぬが身の仕合せわしが事思ひきり、他家へ緣付して下され、討死と聞くならばさてそ嘆かん不便や」と自由思想を抱ける重次郎は自己の愛物を他に奪はるゝの嫉妬より約婚の初菊に終生の孤獨を強ふる如き惡漢たる能はず況んや武士道とか貞節とか云ふ言辭を以て初菊に死を迫る如き殘忍を敢てする無情漢たるを得んや、豐頰花顏の少壯士官、眼前に羽柴といふ强軍を控え乍ら潔く愛人に再婚を說くの狀、沈思して觀じ來れば虞や虞や汝を如何せんと嘆ける執着深き項羽の如き其愚遂に及ぶべからざるを思ふ。

三　初菊論

再婚を說ける重次郎に比して初菊は更に進步せる思想を有せりき。重次郎は言へり「祝言の盃せぬが互の身の仕合」と、彼れは三々九度の盃によりて婚姻の成立を認めたり、されど初菊は言はずや、「二世も三世も女夫ぢやと思ふて居るになさけない、盃せぬが仕合せとは

見よ意氣天を衝く本誌の内容を

實業之世界

毎月一回一日發行 第六巻第四號 定價郵税共十二錢六冊六十一錢十二圓冊九卅二錢御注文一切前金也

發行所　東京芝三島町　三田商業研究會　郵便振替貯金口座三千四百三十三番

新學期開講

實用女學講義錄

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ヶ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して「實用女學講義錄」を發行せり。

▲講習期一ヶ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は毎月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲毎月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り毎號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を掲ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ヶ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◉新學期開講＝四月三十日迄入會金を全免すべし◉

見本つき規則　無料進呈

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺
電話本局三〇〇四番
振替口座四二〇〇番

米國專賣特許

プレスト洗粉

理想的美人は常に
プレスト洗粉を
使用せられたる
結果なり
美を求むる點よりも
經濟の點よりも
プレスト洗粉の
外あらじ

定價
袋入金二錢
大袋金十錢
同金十五錢
鑵入金五錢
同金七錢
特製金壹圓

東京牛込
本舖 山本玉川堂



●造花教授

女子の嗜みなる髮飾……家庭裝飾……店飾……宴會卓上式場其他の裝飾用として用途廣く……●家庭手藝として品よく趣味深く……習熟し易く……

果實蔬菜模造術 傳授 職案内無代送呈す貳錢券送れ、製品見本は十二錢

男女の職業として割合よく……體裁よく……而かも材料は低廉……製品は高價にして珍重せられ……有利有益比類なし……廣く遠近に傳習生を募る

造花秘傳 ●大成造花講義

●四六判美本全一册●優美口繪插繪圖案十五種の切形一揃添正價六十五錢送料八錢（切形丈は廿錢）出除●外に四六倍判十三葉

内容（造花の通義通則、梅櫻勿忘草躑躅桔梗朝顔菫南天薔薇菊撫子百合牡丹西洋花葡萄等廿餘種の造花法及諸材料價格等

●本書は說述平易通俗手を取るが如く初學者の獨習用に適するは勿論諸學校の教科用參考用及び學生の副習用に最適當なる實用書なり

男女就職の捷逕は簿記計算の術を最とす本會此に阪田簿記學校長の名著

●簿記計算事務自宅講習録

一、二、三期分合二册送料共金一圓●見本九錢規則二錢

を發賣す……賞罰隨意……以て世間徒食の嘆を絕つを得べし

美術の普及……風雅の擴布……好尙の馴致……には繪葉書を最良とす

人格の修養……永久の紀念……廣告の利用……美術家の最好伴侶（千人畵伯名畵繪葉書）及數十種の美術繪葉書目錄無代進呈す返信券送れ

●繪葉書發行

石版木版寫眞版打廉價

調進

●神社佛閣名勝古跡旅亭旅館古文書畵珍品象嵌等御好次第家藏紀念諸會其他各方面の御注文を乞ふ

東京神田美土代町二 **日本彩葉會** 振替口座一二四四九

上品なる滑稽雜誌

毎月二回
一日十五日發行

笑

「笑」は安くつて面白い
日本一品の滑稽雜誌なり

一部 **拾貳錢** 郵稅壹錢◎一ヶ月郵稅共前金廿五錢◎三ヶ月七拾參錢◎半年增刊共一圓六十八錢◎一年同參圓參拾錢

◎◎ **樂い日を送らんとする者は『笑』を讀め！**
病めるもの悶ゆる者は來りて我『笑』を讀め！

△泰西名醫の曰く人は笑ふ度に一回五分宛壽命を延ばす事を得べしと、『笑』は長壽の仙藥なり。

◁掲載要目▷

▲**滑稽小說脚本** 毎號諸名家の新作二三篇を掲出す。

▲**滑稽輕口** 辯じ去り辯じ來りて巧に人の頤を解く。

▲**時々諷言** 時々奇警なる冷笑、嘲笑を試みて溜飲を下ぐ。

▲**名家閑談** 諸名家に就いて親しく樂天的の工夫を盡す。

▲**家庭笑話** 無邪氣にして最も面白き物語を集む。

▲**娛樂叢話** 遊藝、遊藝に關し趣味ある談話を載す。

▲**落語** 毎號賣出しの落語家に囑して其妙舌を揮はしむ。

▲**繪畫寫眞** 美麗なる風景美人の寫眞警抜なる漫畫廿餘圖を挿む。

◎◎ **家庭を愛する旦那樣は必『笑』を購へ！**
家庭を面白くせんとする奧樣は必『笑』を購へ！

△活動せんとする者は慰藉なかる可からず、『笑』は絕好慰藉者として活動者が唯一の伴侶なり。

發行元 東京麴町區內幸町一丁目五 **光村出版部** 振替貯金口座東京四六壹壹

わんまり聞えぬ光義殿、』とは初菊の胸中より噴出せる眞紅の熱血なり、夫れ結婚とは祝盃儀式の如き淺薄なる外形のものにわらず、二世も三世も夫婦と思ふて居る、これ即ち結婚の眞義に非ずや、善美を盡せる結婚の式事何の權威を値するものぞ然るに盃せぬが仕合とはわんまり舊式に候はずや光義殿と、突込み來る鋭鋒豈に快哉を呼ばずして可ならんや、弟君の出陣を見て『君死に給ふ事勿れ』と歌へる某女よりも更に初菊は天眞を流露して言へり、祝言さへも濟まぬうち、討死とは曲がないわしや、何ぼでも殺しやせぬ思ひ止つて給はれ、とは如何にも極端なる武士の新妻の言に非ずや祝言の權威を無視せる彼をして尙此語をなさしむ此の一句實に女性の肺腑を抉出せる者といふべし、一國一事ある時武人の妻女悉く一致して『わしや何ぼでも殺しやせぬ、思ひ止つて給はれ』と叫ばんか、天地は恰も暴風到らんとして雲黑く電閃頻りに人を射て萬籟寂滅たる光景を演出せん、恐るべきかな、されど彼は女性なりき、遂に周圍の事情に打負けて心にもあらぬ三々九度の祝盃を擧げたり、されど彼れは知れり、これ結婚の祝盃に非ずして生別死別を兼ぬる血の涙なり！と慘憺たる此光景、遂に彼は人前愧ぢず其本性を曝露して曰へり『せめて今宵は凱陣を……』此夫にして此妻わり、予は彼らを武門に生れしめたるを悲む。

◉樂き兒童博覧會

▲兒童博覧會 は四月一日より五月十五日まで三越呉服店特設陳列場に於て開かれんとす會長は日比翁助氏、顧問は巖谷小波氏である。

▲兒童博覧會 に陳列すべき物品は左の各種とす

(一)玩具、人形、遊戯具一切(二)兒童に關する圖書、繪畫、寫眞其他印刷物(三)和洋兒童服及び附屬品一切(四)帽子靴、下駄草履及び附屬品(五)少女用小間物、化粧品及び造花類(六)洋傘袋物其他兒童携帶品一切(七)乳母車其他乘物類(八)學校用品及び文房具類(九)體育運動具(十)兒童用椅子、卓子其他什器類(十一)和洋樂器及附屬品(十二)兒童に關する菓子及び食料品(十三)動植物、地理等の標本(十四)電物、機械、船舶武器等の模型又は標本(十五)保育所及び教育用器具

同會に出品御希望の方は來る三月十日迄に三越呉服店內兒童博覧會出品係へ御申込わるべし尙詳細の事は同店へ直接聞合せらるべし

第一號 (一七)

夫婦の力

勝間舟人

▲夫の力に倚頼する妻は平凡なれど殊勝し、夫の力に信頼して猶ほ之に自己の力を貸す者は頼母し。

▲夫の力を疑ふて、ヤキモキ氣を揉む妻は愚なり、夫の力を無視して、之に信頼せざる妻は更に愚なり。

▲夫の力を實力以上に買冠りて信用し過ぐる妻は其愚憐れむべきも其情は寧ろ愛すべし。

▲夫の力を假らずして家政を處理せんと欲するは誤ちなり、如何に其妻は手腕あり、實力ありとするも、自己一人にては家運の隆昌到底望むべからず、夫の力と相待つて始めて家政に成功するなり。

▲夫婦は恰かも縄の如し、縄は素と藁と藁とを綯ひ合せたるものなれど、藁よりも力あり、例へば一本の藁にては十斤の重量にも堪えずといへども、二本を寄せて綯ひ交せる時は、百斤の物も能く持上げ得べし、夫婦も亦た此の如く一人々々に分離しては其力甚だ弱し

といへども、組合ひて夫婦といふ共同團體を作り、其力を家庭に集むる時は、處帶の重荷も案外輕く擔がるゝなり。

▲是に依て之を見れば家政の要は夫の力を假るにあらず、妻の力を待つにあらず、共に力を協せて事に當るにあり、夫婦の共同力を以てすれば家庭の經營何かあらん、余は之を以て世間多くの夫婦が其力を一にせんことを望むものなり。

女學校案内

高等女子佛英和學校

▲所在　東京神田區仲猿樂町電車通

▲學科　修身、國語、佛語、家政、和洋裁縫、圖書

▲主義　基督教主義

▲校長　佛人オグスチンヂヨゼフ

▲寄宿　通學よりは寧ろ寄宿を奬勵し家庭的教育をなす

家庭と劇

岡村柿紅

芝居を無學の眼學問と云つたのは昔の事でした。然しそれは俗の俗人に用ゐられた言で、其の言の中には、教育のある士人の見べきものではないと云ふ意味――即ち幾分の輕侮の意味が含れて居たのです、ですから健全なる家庭には觀劇趣味といふものはあまり歡迎されて居りませんでした。今でも所謂昔風の堅い家庭の堅い娘さんなどは、芝居などへは足を入れた事もないといふのが一つの自慢條件にされる例も度々聞く處です。而して其理由とする處を聞くと、芝居は多く淫卑にして近く可からざる者といふ位なもので、芝居其の物が惡いといふ程の確乎した議論もないやうです。芝居は絕對に淫卑だといふ斷定の無い限りは、此の議論は無論立たない事になります。で、其の所謂物堅い家庭では、必ず小說を入れる事に就ても同樣に異議を唱へるでせう。小說を家庭に入れる事に就ては是非區々のやうで、私も之れには或る制限を要するとは思はれますが、芝居に就ては、小說程の嚴格なる制限は要るまいと信じます。小說の方は何の彼のと云つても、餘程自由になりました。自然派の作物の或物の如きは、眼を皿に最新文學の眞義を覓むる鑑賞家の拍案には値しませうが、例の物堅い家庭には確にまだ不向なものと信じます。芝居の方は到底小說程進んで居りません否寧ろ遲々としてあまりに進步の足取の遲れるは屢々識者から攻擊されて居りますが、さりとて、昔のまゝの淫卑なる濡場、無稽なる怪談、慘鼻なる殺傷等は漸く舞臺から退けられるやうになりました。斯る芝居に依て善とも惡とも大した感化があらうとも思はれません、故に無論芝居を以て眼學問といふ如き教科書用にするのも愚ですが、斷じて近く可からずとするのも餘りに頑固な議論だと思ひます。要は趣味の如何にあります。趣味の無い者に奬勵する必要もありませんが、之れに依て慰藉される者は敢て他より阻む必要はあるまいと思ひます。

風流旅硯

山田旭南

西行が雲水の風流に及ばずばしかれ。我も一癖の宿屋のよな〳〵を、後の思出にもとて旅硯とは名づけたり。見る方もなき枯野の草をだに分け給ふ人もあらば、せめては其袖に縋らんかな。

道中日記の表紙に、

　門出すや八百八町花の春

一年其との音信もせず、旅に日を重ねて紀の國は和歌山の友なる家に飛込みしが、主人は打驚き、這は何としての旅姿ぞ、偖は又無分別なる風狂の果かといふに答へず、密に彼が硯の蓋にかきつく。

　逢たさや戀ならなくに青蜜柑

秋はや〻暮近き頃、一とせ東海道は戸塚の驛に遊びしとき、夜は更けて獨り著作の筆を走らするに思ひもかけぬ二人の赤子の啼聲を訝かしみ、折から來りし婢女に尋ねれば、隣の人の妻を失ひての貰乳と語る。そゞろに物の哀れを覺えて、

　貰乳を待つ間や門のおとし水

夫子夫れ自ら己の艶福に驚くと勿れ。見よや粧鏡の臺はたが爲めの姿と、新妻を携へて大磯に遊べる友を訪ね、密に彼が袂を引いて笑ふ。

　梅柳その白粉の春と何れ

力士某、妻を娶りて、其故郷上總の東金に興行しける時、我も旅宿を出て見るに、かねて知れる女なりければ、戯に一句をおくる。

　角力取勝つた其夜のさゝめ言

數家砧杵秋山下。一郡荊榛寒雨中。と相州葉山の客舍に獨座の襟を正す。

　肌寒の心もとなう暮る〻哉

寒雨窓に入りて燈火暗く、印旛湖畔の客舍つひに愁に勝へず。

　病鳥の軒に來て死ぬ寒さ哉

信州稲荷山に宿する二日、一夜は遠く尺八の妙なるを聞き、一夜は近く忍駒の艶なるを耳にす。

秋風や信濃に寝たる二日程

同國輕井澤に在りける頃、戯れに三日順禮に出立つ。

順禮に出る日をかへる燕かな

梅澤墨水奥の松嶋に遊び、我に書を房陽北條の客合に寄せて曰く。

題　菅笠　　　　墨　水

陸奥にさみだれそめて菅小笠

かへし

其留守や鰹の味も老いけらし

伊勢なる太田玉茗を訪ふ道すがら、夜はるかに鈴鹿山を望む。

露霜や闇の鈴鹿の星明り

一年足に病ありて相州大磯の別墅に正月を迎へける。太箸は取り乍らに雨の足を投出せば、今日ばかりはと弟の苦り切るに、其儘箸を捨てゝ、

正月は餅の味てそいやしけれ

二十とせの我世の幸はうすかりき
せめて今見る夢やすかれな　（晶子）

春の恨

秋の人

誰の悪戯か、櫻の小枝が土堤の上に棄てある、稍褐色かゝつた若芽も花瓣も哀れに萎れて居る、自分は拾ひ取つた、春の命も、一度は其處にあつたのだと思へば今一度甦らして見度い。家に歸つて水を吹きかけて一輪挿しに移して見た。

翌朝になつて見ると花も葉も元氣ついて居た、然し如何に元氣づいて居たとは言へ、昨日梢にあつた時程活々した春の華の俤を何うして見ることが出來やうか。一度人生に蹉跌したものは是である、水を吹かけられても人生の春には再び笑まぬ。一度破れたる胸を懐ける乙女は是である。花瓶に移し挿しても、再び『人生の梢』に笑む時はない。

春は逝き、復春は逝く、けれども尚還る可き「春」を持てゐるものは幸である然し世には、還らぬ春に憧がれ果て、泣き嘆き、悶へ憊れて、哀れに凋み果つる、花の命も尠くはない。あゝ春は歡樂の朝にあらずして、哀愁の夕である。散る花、逝く水、何れか長き春の悲を歌はざる……あゝ春の恨の長い哉。

小品一篇

德永保之助

女の泣き聲

ある冬の晩、私は火の氣もなくて、ガランとした室の眞中に、小い暗いランプのだん〲油の乏しくなつてゆく音を聞きながら、その前に一人ボンヤリ座つてゐた、燈が微かな吐息のやうな風のけはひに搖いで、消えそうになると、うす暗い四邊を見廻して、私は何ものかに襲はれるやうに覺えた。身體のどこからとなく冷たい身慄ひが傳つて來る。

戸外は烈しい風の音が、私の荒れた家の周圍を吹き廻してゐた。

その中でふと耳をすますと、向ふの壁の中で何だか音がする、人の呼吸のやうに聞こえる、私は抑へ難い好奇心に驅られて、急に立つて暗い壁の方へ歩いて行かうとした。……とその瞬間私の心は怖しいものでも見たやうに慄へ出した。それは早くもポーの「黑猫」を思ひ出してゐたので。

しかしそれも一寸の間で、此度はその聲が確かに反對の方――そこには高い窓がある――で聞え出たので私はホツとしたやうな心持になつた。そこで好奇心はまた私を窓の方へ遣た。聲は窓の外から聞えて來る。よく聞くと、まさしく人の聲で、女だ。泣いてゐる私は窓に倚つてそれにきゝ入つた。戸外の風は、女の泣き聲を奪つて、とぎれ〲にした。

しかし、私は何故か窓は開けやうと云ふ氣がしなかつた。そして猶はヂツと、その泣き聲を見詰めるやうにした。……風の音にまぢつて聞こえる女の泣き聲と、私のさまよひ歩りく靈の泣き聲と、……こんな纏らない考へがこの時無意識に私の頭を往來した。

やがてふと氣が付いて四邊を見廻した時、とう〲油が盡きて了つたとみえて、燈が暗くなり暗くなりして、ふつと消えて了つた、水のやうに冷たい室の中はたゞ眞暗になつた。私の心のやうに、……私は何時までもその中に立つてゐた。

はげしい風の中から、微かに女の泣き聲が聞える!!

壺中雜觀

刀根壺水

○艶陽四月、花將に笑まんとす、向島に、飛鳥山に、小金井に、杖を曳く花見客漸く多からんとす、花を見るゝのは不思議に大抵眼尻を下ぐ、花を好むと色を好むと相等しければなるべし。

○其處と其名とを記せず。或所にて花下の行人私語して曰く「年々歳々花相同じ、歳々年々人同じからず、噫々と」花怪訝の面持して獨語して曰く「年々歳々花異る、歳々年々人相同じ、何ぞ夫れ凡々の徒多く。奇拔な顏をしたものなきや」と。

○產科婦人科醫楠田謙藏氏は刀圭の途に長じたると共に、文學にも志深かりし人なり、去年三月の事。氏が女子の心情を語れる折

此春は都の花を見て置かん
母の餘りに老ひまさぬ間に

と云ふ一首を引き。此歌節調は巧みなりとにはわらね

ど、娘の誠心見えて奥懷しと云へり。

○此春の歌。僕も斯か思へり。然して其語りし人は今年の花を見ざる間に旣に白玉樓中の人となれりと聞く佛家の說を聞くまでもなく、人事の儚なさ思はれて哀れなり。

○ミラボーは克く痛罵する男なり、其女を語りて「女の戀程褪め易きものはなし」と云へり。由來高遠の說を抱いて人に語るもの多くは女に喜ばれず。孔子も、ソックラテスも、ショウペンハウエルも亦然り。

○此れ女子は幽玄なる說を解するを得ず、卑近なる其容と姿とによりて男の撰擇をなすの故なりや。卽ち肉によりて人を辨別する事最も得意なるものなりや。親切な心情にはだされると云ふは半面心の如くなれど感ずる處は觸覺なり。矢張肉の美に感せるなり。

○富豪にして地位ある人の妻、曾て語りて曰く「夫があつても、矢張添うて見たい樣な氣のする男がありますよ曾世間の體裁や、人前を考へて見たり、行末を憂るから思切た事が出來ぬのです。つまり女でも男でも

亂行を敢てしきらないのは、臆病なのですわね」と。

○臆病なり、社會の道德律に斷乎として反抗するを得ざるは結極臆病なるものなるべし。然れど之あるが爲にてそ社會の桎梏は保たるれ。之なくば人間も獸物も撰ぶ處なし、抑恁麼事を云ふ女は如何なる考へなりや役者買は這麼事を公言するより始まるものなり。

○自由結婚と云ふ事可いには違いなけれど、相手を撰擇し得るの能力なき男女の自由結婚は危險なり、元來人間は常に裏をのみ見せるものにはあらず、表は金看板でも裏は張子なるもの當世の男女に多し、女學生が戀に一生を過る所以なり。

○戀人が初めて來た時糠味噌を作つて見せる女はなかるべし。白粉と香水とに頼らでは戀は成立し難きものと思はゞ、其女から白粉と香水とを取去りて後幾何の價値ありやを熟慮すべし。之男の側の事なり。

○巧言令色する男の親切を何時迄も續くものと思ふは章魚を生きて居る時より眞赤なものと思ひ、蝦は海に居る時から腰の曲つたものと思ふと同樣なり、惡る男

の口に迷ふを女の意志弱きものと世に云ひ囃せり。

○「女とや、汝は弱きもの丶名なる哉」とはシエクスピアのハムレットの言葉なれど、其實惡る男が口癖に唱ふる處なり、危い哉。然れども此れは世間知らずの女に限り云はる丶處。

○女は猛獸なりとは何やらの書にて見たり、猛獸は陽に猛にして陰に正直なる樣に思はる。寧ろ女は獰惡なる狐の如しと云いたらん方當れり、社會の總ての罪惡は多く女より出づ。然も其出でたる女は口を緘して我れ知らず焉を極め込めり。

○マックスオーレルは、女は男より後に此世に出來た故、男より尊しと云へり、總て此世に生れ來るに後より生れたるものは前に生れたるものより尊からば、天保生れの學者より、今朝裏の小舍に生れた許りの小猫の方が尊かるべき筈なり。

○奈良の大佛と、信濃の善光寺と、淸水の觀音と何れが尊きやとの奇問三國の人の間に生じたる時、何れでも一番古いのが尊しと云ひし者あり。其が定まれば此問題も定まる道理なり。

父の家

守田有秋

「一」

私は父の家を尋ねて行つた。其は最う夕暮近くであつた。迷ひ迷つた末、立つて思案に暮れて居ると、折能くも郵便屋が通り合せたので、私は郵便屋に西興除への道を聞いた。

「其は、此の原を突つ切つて、川の縁に沿うてお行なさい、直ぐ取つ付けの村です」

言ふなり郵便屋は、私の禮を言ふ間もなくぱた／＼と、鞋に埃を立て、急ぎ足に行つて了つた。南瓜と茄子と、陸稻の間の道を通つて、其の黒い小倉の洋服が、小さく、小さく、漸次に隠れて、遂には漸く帽子の白い蓋が、ちら／＼と眼に入る許りになつた。

私は、初て自分に返つた様に、敎へられた道の方に進んで行つた、原は千茅、熊笹などの無性に生へた、極く不毛な土地で、近頃開墾されかゝつて居る様子である。

私は其原の中程にある一條の路を辿つた。

夏の眞中とは言ひながら、此處には早や秋草の白い花を着たのさへある、黄色い女郎花、薄紫のヂキタリス、百合科の名も知らぬ赤い花、其れが黎や、犬蓼の中に交つてとり／＼の色を誇りがに示して居るので、山の趣さ川の眺と、來る道々の景色に馴た私の眼も、此の展開された一望の平野に出た時には流石に雄大な感に打たれずに居なかつた。

原の中程に小さな杜がある、杉の古木が蟲々と天を摩して、黒い綠の影を大地に投て居る、籠りと、見るからに陰氣な杜である、其杜の中に小さな祠がある、其の赤い鳥居が木の間から、ちらと見える。空の色は何時か濁つて來た、雲は低く原の上に影を垂れて、雨を催すかの樣に、冷い夕風が靜に草の上を吹て居る。

軈て私は原を横斷して、川に沿て行つた。水は黒く渦を巻て、如何にも深相に見える、時折り、　か何かゞ、水面に飛で居るのを見ると、水門が近くにあると思はれる。

私は橋を渡つた、渡ると其處に休茶屋が一軒ある、茶屋の前には村の人が集つて居た、小兒や老人を一緒にして三十人餘り、何かしら面白相に立て見て居る。思ふとはなしに私も其の群に入つた。

茶屋の土間には、二枚合せの蓆が布いてある、蓆の端には二十五六の陰鬱な、見るからに寂しい女が、白いものをてヽと塗つて、古びた月琴を彈て居る、其に合せて一人の男が、向ふ鉢卷か何かで、劍舞の眞似を遣て居る。恐らく食ひ詰めもの、夫婦連が法界屋にまで墮落したものであらう。

劍舞が一段濟むと、人々は、上手だ、上手だと言つて、心から賞めそやして居た、私には何處が面白いのか少も解らなかつた。

軈て、今度は男が三味線を取つて、覺束ない手付きで彈きだした、女は其絃につれて踊つた。人々は動搖めく許り喝采する。單純な、地方生活に飽んだ田舍人の坐興に呼ばれて、旅から旅へ、當途なく流れ流れて、漸く其日の生活を立てヽ行く夫婦連の旅藝人、二人の其の心細さは何んなであらうと、興じ浮れて居る人の聲も、私には何となく涙を滾させるやうな、寂しい、果敢い一種の感を起さした。

馬方は馬を繋いで、歸るのを忘れては見て居る、折々馬の嘶きが橋の袂で聞える。馬方と並んで一人の土方が、

汗と塵に煮染めたシャツの袖を捲つて、背を風にだぶつかせながら立て居る。シャツの胸にはボタンが一つも無かつた。

突然私の後で、「姉さん歸らう」と云ふ小兒の聲が聞えた。私は思はず顧返つた。

十二歳許りの色白な、下豊のした、可愛らしい女の子が、弟とも思はれる十歳位の兒と、手を携いて立つて居る活潑相な女の子である、洗い洒した筒袖の浴衣に、水色メリンスの扱帯を、きちんと垂れて居る。

「姉さん行う」

男の兒は又促す、紺の色の褪果た、筒袖の着物を短く着て、藁草履を穿いて居る。

兩個は、私の目指す興除村の方に歸るのらしい、私は娘を呼び止めて、念の爲め最一度、西興除への道を聞いて見た。

「西興除！ 興除ならば私達の歸る方だわ」

女の子は顏を仰げて答えた。

川に沿ふて、右に、新に開けたと思はれる一條の新道がある、其の片側は川に臨んだ廣々とした開墾地、片側は新に斫り崩されたと思ふ丘續き。新道は、丘と開墾地の間を、蛇の樣に何處までも蜒つて居る。

開墾地には、甘藷や、里芋、唐黍の類が植られてあつた。けれど其も唯だ一部に過ぬ、其の周圍の磽角な、曾て此の世の人の、鍬や鎌の這入た事のない樣な荒蕪した地には、千茅や熊笹と交つて、各種の倭生の雜木が、自由に枝を延し、葉を廣げて繁つて居る、處々に、刺のある、葉の硬い鬼薊が、紫かゝつた花を着て居るのも、際立つて眼に注く。

二丁程行つたと思ふ頃私は褄先き下りのだら〳〵道を右に、以前の川の枝流とも思はる小河の邊に出た其處に

は唯一軒の茅屋がちよんぼりと見える。私が父より教はつた家は確に此の家に相違ない、私は今其れを思ひ出した。小川は橋の處で堰いてある、水は此處で急湍をして、家の横を雪のやうに洗つて流れて居る、生え茂つた榿や栗の樹が遠慮なく水面に枝を延して、渦巻く水に黒い影を投て居る、水は滔々と、絶間なく、地を動搖しては、激しい、重い、壓し付けるやうな、音を止めずに走る。

私は是の、狹い土橋を渡つて、家の裏手に出た、其處には胡瓜や南瓜の這ひ蔓つた小さな菜園がある、私は其の間を拔けて、入口の方に進んで行つた。

私の足音を聞付けて、五十餘りの老婦人が、懷し相な笑を浮べて出て來た。恐らく父の後妻と云ふのは、此の婦であらうと、私は恁う思つて輕く帽子を取つた。

「あの高木さんと仰やるのは、此方でしやうか」

「はい高木は手前共て御座いますが、貴方は何方樣で――」

豫想通り、是が父の住居と知れたので私はホッとしたが、父の後妻なる人と挨拶を仕なければならぬかと思つた時には、顏の熱るやうな氣持がした、無論私は、父の實子には相違ないが、然し此の人を母とは呼び得ぬ關係であるから――。

「私は森山です」

老婦人も初めから、胸には爾うと想つて居たらしいが、さて初めての事とて打ち付けに其とは聞き兼ねて居たやうだ。

『まあ、貴方が、片岡村の賢さんで――』

「はあ、私が賢造です」

「まあ、暑いのに、能うお出でなされました、悒い處で御座いますが、さあ何うぞ、お上りなさい」

此の聲を聞き付けて父も出て來た、赤味を帶びた顔に溢れるやうな笑を湛えて、

「をゝ、來たか、能う來たな、此の十日程は、毎日の樣に待て居た」

恁う言つて父は、

「婆さん、早う水を取つて、足を洗はして遣りなさい。さあ賢造早く足を洗つて上るが好い」

老婦人は、「はい、〳〵」答えながらちよこ〳〵と健かに手桶を提て川の方に行く。

家は堀立て小屋の樣な哀れな茅屋で、屋根と言つてもほんの名のみ、荒木の板を無造作に並べて打ち付けたと云ふに過ぬ、其も一軒の家を、中より仕切つて、半分は住居、半分は物置に充てある。物置には、山から伐り出した許りの丸木や、枯た杉つ葉や、俵に仕た小麥や米が、秩序好く入れてあつた。

家の向は南向で、明りは其の一方から來る許りだ。家の前は、丘を斫り崩して、新に拓いたと思はれる百坪許りの空地で、父は此處に桑を植る心算であつたらしい。

家の西側には、別に一軒に成た小さな廐がある、其には若い駒が一匹繋いであつた。

足を洗つて上つた後、私は更めて、父と小母さんに挨拶を仕た、――私は老婦人を小母さんと云ふより外に一寸呼ぶ可き名を見出さなかつたから。――父は私の來た事を、心から喜んで居る氣色で。

「十日も待たが來そうもないので、最う來ては呉れぬかと思つてな、實は心配して居た處ぢや、まあえい、能う來てくれた、是れで安心した。」

父は大變な御機嫌である。

然し私は、其の時許りは、此の言葉を聞いて滅入るやうに悲かつた、是が父の子に對する言葉であらうかと思つ

た時、私は涙が溢れた。父は私に對して是程までに遠慮して居たのである。

樂しい夕餐の後、私は生れて初て父と同じ家根の下に寢た、而して母の愛より外に知らなかつた私は、泌々と、子に對する親の、男性的愛情を、味はつて見た。

「二」

今度私は、十年振で歸郷したのである。

私の一家が、郷里を出て、岡山の市で店を開いて居たのは、私が六歳の時で、其時から私には、父は無つたのである。

其時私の一家は、若い私の母と、七十を越した祖父、祖父よりは一歳齢上の祖母、其に私を加えて四人暮であつた。

私の祖父は、非常に覇氣の有た人で、農家に生れた人でありながら、各種な事業に手を出して失敗した。例ば、煙草製造とか、綿ネル、毛糸の模造とか、其當時の人の、一寸氣の注き相もない事業に目を付けては、其を大成して見やうと掛つて、有ゆる失敗を嘗た人で、其の結果は、遂に郷里にも居られなく成て、岡山に出て行つた。

祖父は此市で一旗擧て、多年の失敗を挽回する考であつたが、最う其時は、年來の失敗で、心身ともに疲弊し盡した後の事とて、爲す事萬事失敗の上塗許りで、遂に塲末の、或茅屋の中で、枯るやうに死んで了つたのである。

續いて翌年、祖母も、死んで了つた、殘たつのは、其時九歳の私と母許りであつた。

（未完）

花壇の造り方

老花守

園藝家が播種の季節として待焦がれた春の彼岸が來ましたが是からは樂しみの中に忙がしくなるのです而して草花を植ゑるには如何なる土地でも一段高く即ち花壇を作る方が趣もあり草の爲めにもよろしいのです

▲端植　花壇の端は石又は丸たの切株或は竹の網代などを以てするのが普通ですが丈の低い草を植ゑるのも面白い者で之には雛菊庭石菖撫子松葉牡丹松葉菊なぞを適當としますが此端植には一つの注意を要します其は此端植の餘り近くに他の草を植ゑぬ事で何故かと申せば丈の高い草の葉の下になりますと端植の草が枯れる虞があります

▲色分花壇　花壇の造り方で面白いのは此色分花壇です其造り方は花の色に依つて花壇の數を造るので一つの花壇には白い花の者のみを集め第二には赤第三には紫第四には黄といふ樣に分けて植ゑるのですが中々

に美しいものであります而して第二の方法は花壇に列を爲して草を植ゑ第一列には白第二列には赤といふ風に色を分けて植ゑるのですが之も又面白いです。

▲文字形花壇　之は讀んで字の如く種々の文字形に花壇を作るのですが之は餘程其花壇を大きくしないと文字が分らなくなつてしまひす。

▲池中花壇　之は池の中に多くの島を置き之を花壇とするのですが紫や紅や黄の花が水に映じ或は水上に垂れて咲く趣がなか／＼に面白いものでありますが之は此花壇の周圍をセメントで堅める必要があります

▲置花壇　之は何處へでも持運びの出來るやうに底をつけた小花壇ですが之には植込む草を擇ばねばなりませぬ撫子、常夏、石竹及び小田卷のやうな丈夫で丈の低いのがよいのは申す迄もありませぬ而して其底には處々に穴を穿ちて水を通すやうにして置く必要があります

此外花壇の造り方は名目に考へますれば種々趣のある面白いのがありましやう

▲編輯だより　有秋生

▲準備も何もなく突然編輯に取掛り候事とて其の亂雜、不整頓まことに寄稿家諸君及讀者諸君に對して申譯なき次第に候、然し次號に於ては今少く見榮えある樣致し度き考に候

▲紙面の都合にて次號に讓り候は、後藤宙外氏の文壇新運動の談、みどり君譯の露西亞革命の少女、其他の家庭的記事にして、本號締切迄に間に合はざりしものは、大石祿亭、久津見蕨村、小劍、秀湖諸氏の原稿に候

▲今一つ御詫びせねばならぬ事は、從來前金拂込の諸君に對して其義務を盡す能はざる一事に御座候、こは偏に經營者の變りし結果、斯る不始末を演出するに至りしなれば、唯だ唯だ讀者諸君の御宥恕を願ふの外は無之候

▲尙ほ小生は本號印刷の上、旅行に上る考に御座候へば自然讀者諸君に見ゆる機會もある可くと存じ候

次號豫告

文壇の新運動	後藤宙外
小說	上司小劍
同	白柳秀湖
父の家（結了）	守田有秋
露西亞少女	みどり譯
女子の解放（續）	田岡嶺雲
尼ヶ崎の段を讀む（結了）	沖野五點
未定	久津見蕨村
未定	大石祿亭
小說	山田旭南
未定	刀根螢水
未定	勝間舟人
自由結婚の可否	諸家
小說月評	有秋生
鷄卵料理	某女史
未定	若宮卯之助
其他諸家	

改正定價

一部	金拾錢
六ヶ月前金	五十五錢
一ヶ年前金	一圓
（何れも郵稅共）	

廣告料	
特別一頁	廿五圓
普通一頁	拾五圓

▲本誌は每月一回（一日）發行とす。

▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。

▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何冊の前金と明瞭に御記載を願ひます。

▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。

▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切た時には帶封に『前金切』と朱印を捺して上げますから御注意下さい。

▲歐米各國よりの御注文は別に一冊に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治四十二年三月卅日印刷
明治四十二年四月一日發行

東京市本所區綠町三丁目八番地
發行兼編輯人　中原幸吉

東京市神田區豊島町卅九番地
印刷者　金山佐治

東京府下大久保中百人町二百十番地
發行所　家庭雜誌社

大賣捌所　上田屋　良明堂　東京堂　東海堂



瓦斯の應用
アカリとヘツイ
(取付の費用は一文も戴きませぬ是非御試しを願ひます)
白晝の如く、黄と白とを見分くることが出來る位、光力が强う御座います。普通用ひられて居るのは五十燭光で、一時間瓦斯代が僅か四厘弱しかいりません。
御飯なれば、二升が十七分間位で出來、瓦斯代一錢四五厘い御湯なれば四五分で沸きます。殊に竈は月三十錢の損料で御貸致しますから、至極御手輕であります至急御申込下さい。
東京瓦斯株式會社
特色＝清潔、輕便、安全、經濟、

文學士 倉橋惣三君編

基督教子供の本

いらくさ
幻燈會
たゞつ子
はつ夢
百枚日記
以下續々刊行

定價金六錢 郵税二錢
部數御求の方へは割引す

聖書、基督教書類販賣

新約全書印刷鮮明彩色摺 **パレスチナ地圖**
四六判全紙一枚摺
軸物一本七十錢 郵税八錢
一枚摺一枚五十錢 郵税二錢

宮川巳作君著 **加拉太書研究**
上製一圓二十錢
並製九十錢
郵税不要

米國トーレー博士著 新井正平君譯 **基督者の成功**
上製三十五錢
並製三十錢
郵税四錢

東京市神田區駿河臺西紅梅町

振替貯金口座東京六三三〇番

ドクトル有田九皐君著 **自然と健康**
上製一圓二十錢
並製九十錢
郵税不要

衛生滋養豆乳製法
定價五錢
郵税二錢

家庭お伽 **次郎のお手紙**
定價十八錢
郵税不要

英和對照 **新約全書**
定價七十錢
郵税八錢

葛卷星淵君著 **處女の死と靈魂不滅**
定價八錢
郵税不要

小山内薫君著 新體詩集 信仰餘賦 **小星**（いさゝほし）
定價十八錢
郵税二錢

新體詩集 **小野のわかれ**
定價二十錢
無税不要

中庸堂書店

金鷄印ミルク!!!

◎金鷄ミルクを御存知ですか？
◎金鷄ミルクは日本一のミルクです！世界一かも知れません！
◎「鷲」よりは劣るだらうと仰有るのですか？
◎分析表を御覧下さい！屹度相撲になりさうです！
◎「ネッスル」ですつて？「人物」ですつて？論外ですサ！
◎「鷲」と同等として考へませう！何方が「新鮮」だかゞ問題です！
◎オット問題にはなりませんネ「鷲」は五千里外から來る品ですもの！
◎日本人にはパンよりも米の飯が適當でせう！
◎何と言つても、日本人には日本のミルクです！

花島煉乳場製



◎國家經濟といふやうな觀念から言へば尚更です！
◎四十四年から舶來ミルクは一鑵十錢ほどの税がかゝります！
◎否でも應でも和製ミルクの時代になります！
◎今の中から最上等の和製ミルクを用ゐなさるが肝心です！
◎「舶來は上等だ」とは限りません！
◎お醫者樣がさう仰しやいますつて？困りますネエ！
◎お醫者樣が始終ミルクの御試驗をなさるでもあるまいし！
◎それにミルクとお薬とは別ですもの！
◎金鷄は日本唯一の純良品です
◎金鷄ミルクは必ず覺えて頂かねばなりません！

發賣元

東京市日本橋區
大傳馬町一丁目
逸見山陽堂
電話浪花二一五　振貯三九六

一「金鷄」印定量分析

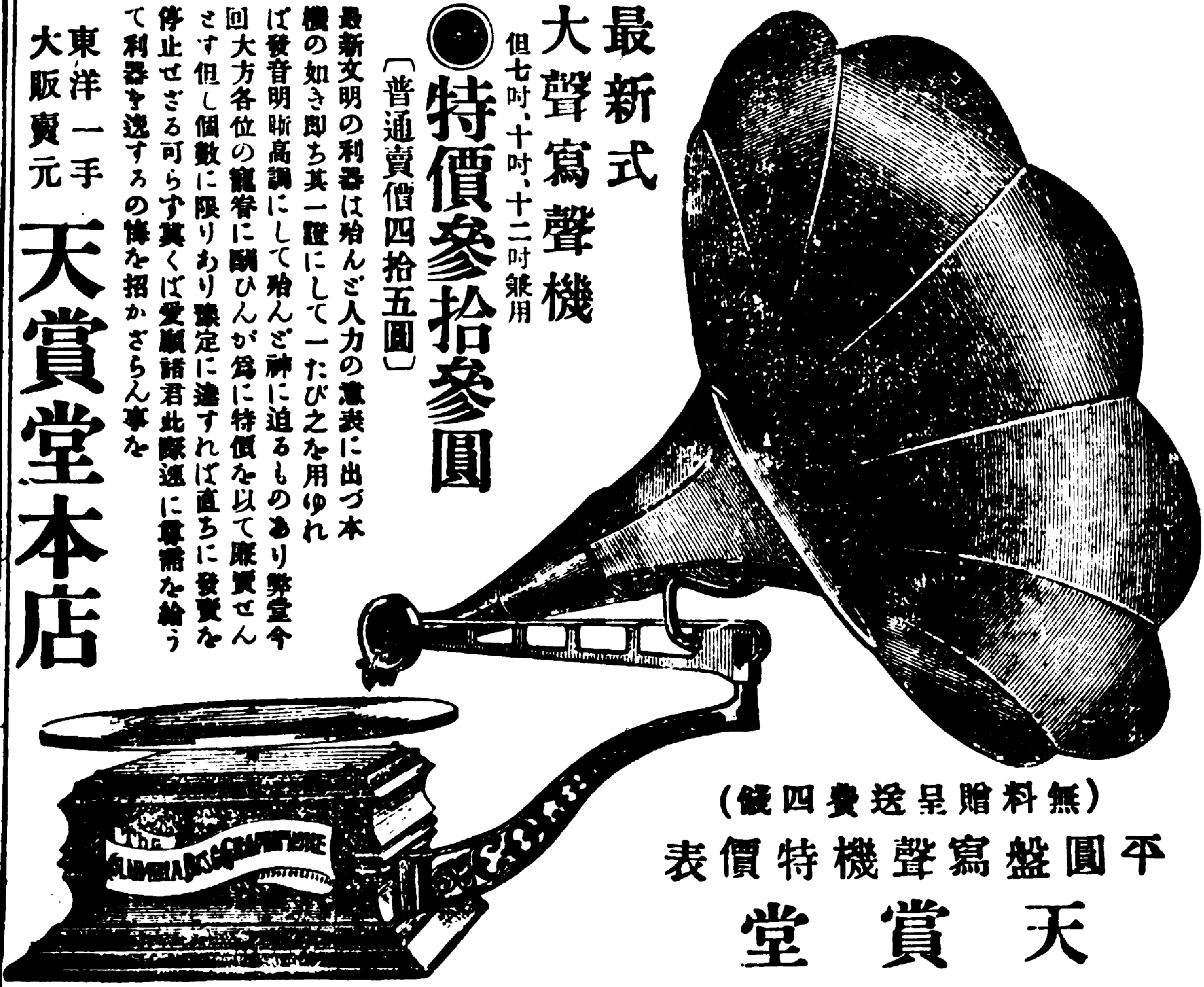
脂肪	九、六四〇
含窒素物(蛋白質)	九、〇壹参
乳糖	壹五、貳貳八
蔗糖	参六、参九四
鑛質物(灰分)	貳、〇九〇
水分	貳七、六七五

明治四十二年二月六日

一「鷲」印定量分析

水分	貳九、五五〇
脂肪	九、四〇〇
含窒素物	七、八七五
乳糖	九、五壹参
蔗糖	四壹、七壹九
灰分	壹、九四参

明治三十六年二月七日



最新式
大聲寫聲機
但七吋、十吋、十二吋兼用

●特價參拾參圓
〔普通賣價四拾五圓〕

最新文明の利器は殆んご人力の意表に出づ本機の如き即ち其一證にして一たび之を用ゆれば發音明晰高調にして殆んご神に迫るものあり弊堂今回大方各位の寵眷に酬ひんが爲に特價を以て廉賣せんとす但し個數に限りあり豫定に達すれば直ちに發賣を停止せざる可らず冀くば愛顧諸君此際速に購需を給うて利器を逸するの悔を招かざらん事を

東洋一手大販賣元 天賞堂本店

(無料贈呈送費四錢)
平圓盤寫聲機特價表
天賞堂

天賞堂神田出張所　天賞堂大坂出張所
天賞堂横濱出張所　天賞堂長崎出張所

●最新發明 寫聲機用 發音調和器（特價貳圓廿五錢）
●教習實用 英語發音機詳解（特價金參拾五錢）
（但見本御希望の方は郵券貳錢送付の事）